

追悼

建築家 大高正人に学ぶ——二つの薫陶

日本建築士会
連合会会長 藤本昌也



故・大高正人氏

1959年の夏、大学4年生だった私は、同級の増山敏夫とともに卒業論文に関することでお話をお聞きしたいと、写真家・二川幸夫さんに紹介をいただき、当時前川國夫建築設計事務所にあった建築家・大高さんを訪ねていた。この大高さんとの初めての出会いがきっかけとなって、その年の暮れ、私たちは大高さんの要請で再びお目にかかることになった。

用件はアメリカから帰国した建築家・榎文彦氏とアーバンプランニングの本をつくることになり、その手伝いをしてくれないかということであった。建築を学ぶ絶好のチャンスと、私たちに異論のあるはずはなかった。この作業はその後メタボリズム・グループの活動に吸収されることになり、いずれにしても学生時代のこの貴重な体験は、その後の私の建築に対する考え方や取り組み方を決定的なものとした。

その後、私が大学院を卒業すると同時に大高さんが独立、新事務所を開設され(1962年)、幸運なことに私はその第1期生としての入所を許された。厳しい指導の下、10年の修業の期間を過ごさせていただき、しかも独立後

(1973年)も今日に至るまで、何かにつけては指導、薫陶をいただいていたことになった。以下、この50年にもわたるなるには、それに関わる建築

家はその腕を振るえる社会的な仕組みがしっかりと出来ていないと駄目だと考えておられた。残念ながら、わが国の状況は今なお、土木と建築が乖離し、両者が望ましいかたちで連携する仕組みがうまくつくられていない。そのため大高さんは常々、国の審議会等でこの仕組みの改善に向けての手厳しい提言を繰り返して発言されていた。

さらにただ発言するだけでなく、この仕組みづくりを建築家の実践によって、また連動によって実現する途を常に考えておられた。大高さんが晩年の8年間にわたって日本の建築士会連合会の副会長の役割を引き受けられたのも、地方へと広がり、現代社会が求める新しい仕組みとしての「共同体」構想——協同組合——に行き着くのである。青年期にすでに「協同組合」の辞としていた。

大高さんから受けた薫陶の数々の中でも、殊のほか忘れ難い二つの薫陶について、その真意を私なりに咀嚼し書き留めておきたい。

薫陶の一つ、「まち」をよく見て「建築」を考えなさい」という大高さんの薫陶を建築家に引き寄せて言えば、「建築家は良き都市デザイナーであれ」ということになり、良き都市デザイナーとは、

「美味しい」料理をつくれる名コックとなれということになる。カロリー計算だけでつくればよいという料理人ではなく、誰にも「美味しい」と言わせる「技」を持った料理人でなければならぬのである。

「二つ目の薫陶、「よく考えなさい」という指摘も大高さんが検討図面を前にしての常套句であった。ここで言う「考えて」とは建築家の基本的スタンスの軸となる「思想」のことである。大高さんにとっての思想の原点とは何であったのか。突き詰めて言えば、それは「共同体」の思想に行き着くのでは

ないかと私は考えている。大高正人が存在していたので、本年の8月20日、大高さんは享年86の生涯を閉じられ旅立された。後に続く私たち建築家は、この建築家・大高正人の「実践と思想」の検証を通して、学ぶべき多くの事柄があるのではないかと考えている。あらためて心から「冥福をお祈りし、私の追悼の辞」としたい。